

Title	グーテンベルク聖書と写本の伝統
Sub Title	The Gutenberg Bible and the manuscript tradition
Author	安形, 麻理(Agata, Mari)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2005
Jtitle	Library and information science No.54 (2005.) ,p.19- 41
JaLC DOI	
Abstract	<p>This study compares the physical characteristics of the Gutenberg Bible (B42), the first substantial book printed in Europe using movable metal type, to selected manuscript Vulgate Bibles of the fifteenth century that can be found in several library collections in London. The manuscripts originated in German-speaking countries and represent those that might have served as a model for B42. A comparison is made in order to determine to what extent B42 followed or tried to follow the manuscript tradition, what new features it introduced, and what purpose the new features served. The study focuses on the physical appearance of the book, such as the size, format, general page layout, and script/typeface including the use of punctuation, as well as the arrangement of prefaces and books of the Bible.</p> <p>Close examination reveals that the Gutenberg Bible modelled its physical characteristics on the large contemporary manuscripts made for and used in religious houses, although a smaller format was likely used for the exemplar(s) of B42. It was found that B42 followed the manuscript tradition closely in terms of physical appearance, although it did not make use of red ink for headings and initials. However, B42 did not merely imitate the manuscript style. It aimed at an idealized manuscript. With its strict setting rules, B42 succeeded in introducing a more standardized page layout, despite its complex concurrent printing and composition, to an extent that manuscripts could never achieve. At the same time, it created a new tradition for the printed Vulgate.</p>
Notes	原著論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000054-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原著論文

グーテンベルク聖書と写本の伝統

The Gutenberg Bible and the Manuscript Tradition

安 形 麻 理
Mari AGATA

Résumé

This study compares the physical characteristics of the Gutenberg Bible (B42), the first substantial book printed in Europe using movable metal type, to selected manuscript Vulgate Bibles of the fifteenth century that can be found in several library collections in London. The manuscripts originated in German-speaking countries and represent those that might have served as a model for B42. A comparison is made in order to determine to what extent B42 followed or tried to follow the manuscript tradition, what new features it introduced, and what purpose the new features served. The study focuses on the physical appearance of the book, such as the size, format, general page layout, and script/typeface including the use of punctuation, as well as the arrangement of prefaces and books of the Bible.

Close examination reveals that the Gutenberg Bible modelled its physical characteristics on the large contemporary manuscripts made for and used in religious houses, although a smaller format was likely used for the exemplar(s) of B42. It was found that B42 followed the manuscript tradition closely in terms of physical appearance, although it did not make use of red ink for headings and initials. However, B42 did not merely imitate the manuscript style. It aimed at an idealized manuscript. With its strict setting rules, B42 succeeded in introducing a more standardized page layout, despite its complex concurrent printing and composition, to an extent that manuscripts could never achieve. At the same time, it created a new tradition for the printed Vulgate.

安形麻理：慶應義塾大学文学部（非常勤講師），東京都港区三田 2-15-45

Mari AGATA: Faculty of Letters, Keio University (part-time lecturer), 2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo

e-mail: mari@slis.keio.ac.jp

受付日：2005 年 8 月 23 日 受理日：2005 年 10 月 30 日

- I. 初期刊本と写本
- II. 聖書写本
 - A. ウルガタ聖書の成立
 - B. 形態の変遷
 - C. 写本生産とグーテンベルク聖書
- III. 写本調査
 - A. 調査対象の選定
 - B. 調査項目
 - C. 調査結果
- IV. 比較
 - A. グーテンベルク聖書の物理的特徴
 - B. グーテンベルク聖書と写本の比較
- V. 写本の伝統

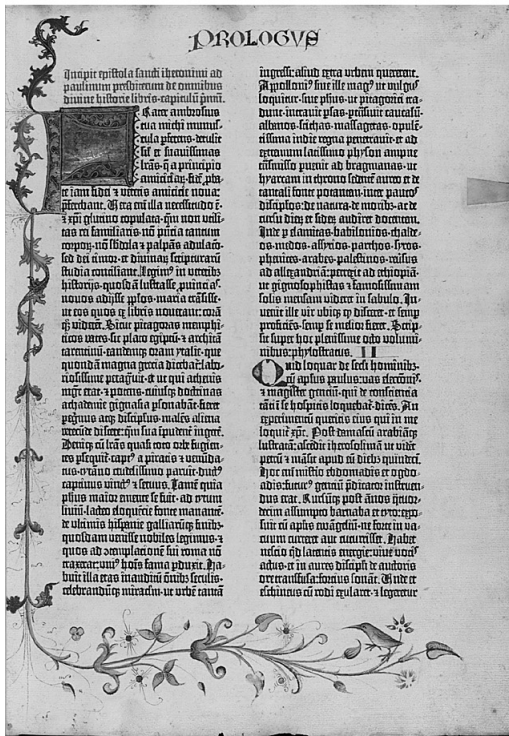
I. 初期刊本と写本

初期刊本 (incunabula) とは、西洋において活版印刷術が発明された 1450 年代から 1500 年 12 月 31 日までの間に金属活字を用いて印刷・刊行された書物を指す。初期刊本の研究には、写本との影響関係の検証が不可欠である。それは、当時は写本が書物の唯一のモデルであったため、印刷という画期的なテキスト複製の手法にもかかわらず、最初期の刊本は写本の伝統を反映していると考えられるからである。初期刊本時代に書物の生産方法と形態は大きな変化を遂げた。しかし、最初期の印刷業者は、既に確立していた写本の流通経路のみならず、形態、素材、ページ・レイアウト、物理的構造、書体などの数々の物理的特徴も写本から受け継いだのである。そのため、最初期の刊本の外観は、同時代の写本に酷似している。

西洋初の活版印刷本であるウルガタ聖書、いわゆる「グーテンベルク聖書」あるいは「42 行聖書」(以下「B42」) は、刊本と写本の類似を示す好例である。B42 は、1455 年頃にドイツのマインツにおいて Johann Gutenberg が印刷したと考えられている二巻本のラテン語聖書である。印刷原稿には同時代の写本が使用されたと考えられるが、その写本は特定されておらず、現在までに失われてしまった可能性も高い。テキストは黒イン

クを用いて印刷され、印刷後に手彩色による装飾頭文字の挿入や朱書きが施された B42 のページは、一見写本のような印象を与える¹⁾。B42 の現存本の中には、より写本に似せるためか、テキスト部分に後から罫線を引いたものさえある。B42 の全体的なレイアウトの写本との類似は、例えば、B42 と同時期の 1452 年 4 月 4 日から 1453 年 7 月 9 日にかけて、しかもマインツという同じ場所で筆写された大型の写本聖書、いわゆる The Giant Bible of Mainz (Washington DC., the Library of Congress, MS. 8)²⁾ の任意の 1 ページと並べて見ると明らかだろう (第 1 図)。どちらも余白を広く取った 2 段組のレイアウトで、ページ番号はなく、本文には黒インク、書の始まりや終わりを示す見出しには赤インクが使われており、書の冒頭には大きな装飾頭文字が様々な色で、また章の冒頭にはそれより小さな装飾頭文字が赤や青インクで書き込まれ、各文頭の大文字には朱が入れられている。

こうした高い類似性から、一般的に B42 は写本をできる限り忠実に模倣したと言われている³⁾ [p. 2]。しかし、筆写と印刷という生産方法の違いからは、例えば文字を整然と書くため写本に引かれていた罫線が見られないなどの外見上の違いが生じている。さらに、B42 の印刷ページを仔細に観察すると、行末揃えや字体の使い分けなどに関する組版時の緻密な規則があることがわかる。厳



第1図 B42と写本聖書

a. ゲーテンベルク聖書
(慶應義塾図書館所蔵)

上巻第1葉表「聖ヒエロニムスの書簡」冒頭

画像提供: 慶應義塾大学 HUMI プロジェクト

出典: HUMI プロジェクト, "001"

<http://www.humi.keio.ac.jp/treasures/incunabula/B42/keio/vol_1/2/html/001.html> (accessed 2005-08-18)

b. The Giant Bible of Mainz

(Washington DC., the Library of Congress, MS. 8)

上巻第1葉表「聖ヒエロニムスの書簡」冒頭

出典: Library of Congress. "Europe (Library of Congress Rare Books and Special Collections: An Illustrated Guide)"

<<http://lcweb.loc.gov/rr/rarebook/guide/ra036001.jpg>> (accessed 2005-08-18)

密な規則を採用した B42 の複雑な印刷工程からは、印刷ページ面の外見に関して多大な考慮が払われたことが推察できる。そうした配慮・規則のどこまでが「写本を模倣」するためのものであるのか、印刷という生産方法の変化に付随して結果的にあるいは意識的に新たに導入されたものがあるのかどうか、そして、その後の刊本独自の発展へつながる萌芽がどこにあったのかを明らかにするためには、写本との比較が不可欠である。

しかし、15 世紀中葉の非常に豪華な一群の聖書写本を対象とした多分に美術史的な研究はあるものの⁴⁾、書誌学的な観点からの 15 世紀の聖書写本の研究は十分に進んでいない。これは、聖書写

本の生産が 13 世紀には非常に活発であったのとは対照的に、14~15 世紀には低調であったことも関係していると考えられる。そのため、14 世紀から 15 世紀前半にかけてどのくらいの数の聖書写本が誰のために誰によってどのような素材で作られたのか、また、それがどのような形態のものであったのか、という聖書写本生産の全体像は明らかにはなっていない⁵⁾。結果として、B42 は外見的に写本とよく似ていると一般的に言われるものの、その論拠となりうるような同時代の写本聖書との具体的な形態の比較は、これまで十分に行われてこなかった。

そこで、本研究では、最初の印刷本である B42

と同時代の 15 世紀に書かれたウルガタ聖書の写本を対象として、形態、つまり、物理的特徴（ページ・レイアウト、書体、判型、素材、構造など）を具体的に比較調査する。調査結果の分析から、B42 の外見上のモデルを推定し、B42 がどのような形態的特徴をもつ写本群に属することを意図して作られたのかということを明らかにすることができると期待される。

さらに、B42 が活版印刷術という新しい技術を用いる中でどのように写本の伝統を踏襲し、どのような点ではそれを断念しているのか、また、新たな特徴として何を付け加えているのかを分析する。そして、写本の理想型を実現しようとした B42 が、実際には書物の表象を変化させる契機となり、印刷本独自の発展を準備することになったということを論ずる。

II. 聖書写本

A. ウルガタ聖書の成立

聖書の写本は、何世紀にもわたって様々な素材に書写され続けてきた。その形態は長い歴史の中で幾度も劇的な変化を遂げている。そのため、15 世紀の聖書の伝統を理解し、B42 がどのような形態の聖書群に属するものとして意図されたのかを明らかにするためには、歴史的な文脈の理解が必要になる。本章では、テキストとしての B42 が属する伝統であるウルガタ聖書の概略を述べた後で、形態とメディアとしての機能という観点からウルガタ聖書の形態面における歴史的変遷とその背景を略述する。なお、聖書の各書名の表記は『新共同訳聖書（旧約聖書続編つき）』⁶⁾に従った。現代のウルガタ聖書としては、ドイツ聖書協会刊行の *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem* を参照した⁷⁾。

そもそもウルガタ聖書とは特定の形態と結びついているものではなく、4 世紀末に聖ヒエロニムス (c. 340–420) が翻訳したラテン語訳聖書の系統を指す。なお、キリスト教は 324 年にローマ帝国の国教となっていた。当時、聖書はヘブライ語・ギリシャ語および荒削りの古いラテン語訳 (the Old Latin version) で流布していたが、聖ヒ

エロニムスはそれを編纂・校訂し、聖書全文をラテン語に翻訳したのである。当初は教会内部からの反発もあり、採用の時期は地方によって異なるが、彼のラテン語訳は次第に広まり、7 世紀にはローマ・カトリック教会で用いられる正式なラテン語聖書となった⁸⁾。そのため「普及版」(vulgata, 英語では vulgate) と呼ばれるのである。

ウルガタ聖書はそのテキスト伝達の過程において多くの異文が生じたり、古いラテン語訳の影響で改変が加えられたりもしているが、基本的には多少の修正を経て今日でも使用されている。ただし、聖ヒエロニムスが校訂の結果ヘブライ語聖書に含まれないもののだとして完成版から除いたいくつかの書は、次第に中世（および現代）のウルガタ聖書に含められるようになっていき、その際のテキストには彼が不採用とした翻訳や古いラテン語訳が用いられた⁹⁾。また、現代のウルガタ聖書には含まれないが、中世においては各書に序文がつけられることが多かった¹⁰⁾。序文のテキストは一定のコーパスから選ばれるものの、長い間標準化はされていなかった。つまり、中世のウルガタ聖書は、単一の不動のテキストからは程遠く、むしろ、大体において聖ヒエロニムスのラテン語訳に基づく混成物だと考えるべきものである。

B. 形態の変遷

1. 小型の冊子体

聖書の歴史の初期の段階は、卷子本から冊子本へ、パピルスから羊皮紙へという書物の形態の変化の時期と機を一にしている。「冊子体の誕生」とキリスト教の勃興はしばしば関連づけられる。冊子体の発明も普及も、キリスト教に帰することができるような証拠はないが、キリスト教徒が早い段階から聖書の形態として冊子体を採用していたことは重要である¹¹⁾。冊子体への変化に続いて、さらに書物の主要な素材がパピルスから羊皮紙へと移行していった。現存するギリシアの聖書写本の多数の例が示しているように、4 世紀までには上質の羊皮紙が書物の一般的な媒体として受け入れられるようになっていた。つまり、ウルガタ聖

書が成立した頃には、キリスト教の聖書は羊皮紙の冊子本として作られるのが自然な状況であった。

写本生産の当初の担い手は、修道士であった。現存する初期の写本は少ないが、概して小さなサイズで、アンシャル体 (uncial) を用いて語の区切りや句読点を使わずに一段組で書かれている¹²⁾。British Library (以下「BL」) が所蔵する 6 世紀の写本 Harley MS. 1775 はその典型で、縦が約 16cm と片手で持てるくらいの大きさであることから、説教壇に置くためのものではなく、聖職者が個人的に利用・研究するためのものだと考えられている。

2. 大型化

やがてイタリアではウルガタ聖書が正式な礼拝 (典礼) で使われ始め、特にミサで福音書を朗読することが一般的になっていった。そのため、9 世紀以前の聖書写本で現存しているもののおよそ半数が四福音書 (マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる福音書) のみから成っており、しかもその多くが欄外に典礼での朗読の開始と終了を示す印を持っているのである³⁾ [p. 29]。いわゆるローマ式典礼が西欧全体に広まっていくにつれ、ウルガタ聖書も広まり、古いラテン語訳を次第に駆逐していった。

5 世紀から 8 世紀にかけて聖書の物理的なサイズは徐々に大きくなっていく。これは当時の書物一般の傾向でもあるが、聖書が典礼での朗読に使われることが一般的になっていった影響だと考えられる。典礼における朗読の際には、聖書は書見台に置かれるのが一般的であり、大きな読みやすい文字で書かれている必要があったからである。サイズは大型化していったものの、聖書全文ではなく、聖書の一部分だけ (四福音書のみ、詩篇のみ、モーセ五書のみなど) から構成されていることもこの時期の特徴である。

現存する最も古い一冊で全文を持つラテン語聖書 (pandect) は、*Codex Amiatinus* と呼ばれる 8 世紀初期の写本 (Florence, Biblioteca Medicea-Laurenziana, cod. Amiatino 1) である¹³⁾。*Codex*

Amiatinus は、ウルガタ聖書の普及に大きな役割を果たしたイギリスのノーサンブリアで作られたもので、1,029 葉の羊皮紙に二段組 43~44 行で書かれた 505×340 mm と大型の写本である。

3. 一単位としての聖書

8 世紀末頃には、*Codex Amiatinus* のような一巻ものであれ多巻ものであれ、聖書の全文を含む一つの単位としての聖書という概念が確立していった。カロリング・ルネサンスの時期に、神聖ローマ帝国のカール大帝に仕えた Alcuin (735?~804) がノーサンブリアの写本に基づいてウルガタ聖書の改訂版を編集し、トゥールの修道院の書写室から多くのアルクイン改訂版ウルガタ聖書 (Alcuin Bible) を送り出したのである。その写本は、多巻ものであることが多く、新約・旧約聖書の両方を含むため、概して 420~450 葉、二段組 50~52 行という大きなサイズであり、カロリング体 (Caroline minuscule) と呼ばれる丸みを帯びた小さくて読みやすい小文字の新しい書体で書かれ、豪華な装飾が施されていることが多かった。そうした写本は、裕福な後援者や他の修道院へ贈られたものである。ページ面には書体のヒエラルキーが見られ、例えば主要な見出しはスクエア・キャピタル体 (square capitals)、書の始まりを告げる朱字は uncial、序文はハーフ・アンシャル体 (half-uncial)、欄外標題と書の終わりを告げる朱字はラスティック・キャピタル体 (rustic capitals) というような使い分けがなされている。トゥールの書写室では 9 世紀前半におよそ 100 点もの聖書の写本が生産されたといわれる¹⁴⁾ [p. 53]。結果的にこの種のウルガタ聖書は非常に一般的になり、9 世紀半ばまでには、北ヨーロッパの大修道院は全文の聖書を持つようになっていた。

4. 大型化：ロマネスク聖書

11 世紀の第三四半世紀には、おそらくはローマを起源として、再び大型化の傾向が現れ始める。この時期と場所は、教皇 Gregorius 7 世の改革運動の影響を示唆する。この時代の聖書はロマ

ネスク聖書と呼ばれ、現存する写本には共通する物理的特徴が見られる。つまり、概して非常に大きく重い一巻または多巻もので、上質の羊皮紙に後期の Caroline minuscule による大きな文字を用いて二段組の本文レイアウトに書かれ、書体のヒエラルキーを保持し、一ページ大の細密画を含む非常に豪華な装飾が施されている¹⁵⁾。テキストは通常アルクイン改訂版である。例えば、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ 4 世 (1050～1106) が、Hirsau のベネディクト会修道院 Admont Abbey に贈るためにおそらくはローマで作らせた聖書写本 (Munich, Bayerische Staatsbibliothek, Clm. 13001) は、275 葉から成る一巻もので 614×398 mm と非常に大きく、ふんだんに装飾が施されている。同種の豪華な大型写本の生産は西欧各地において短期間のうちに盛んになったが、貴族や司教などの富裕層の後援者が修道院や教会に贈るために作らせることが多かったと考えられている。12 世紀にシトー修道会、カルトゥジオ修道会、アウグスチノ修道会など新しい修道会が設立されたことも、権威の象徴となるこうした堂々たる聖書への需要を高めただろう。

さらに、12 世紀後半になると、それまで修道院に限定されていた写本生産の市場に、世俗の写字生や装飾職人が参入を始めた。その結果、大型のロマネスク写本は商品として購入可能なものとなっていき、大きな書写室を持たない小規模の修道院でさえ購入という手段によって入手できる基本的な書物となったのである。

大型のサイズと大きな文字という特徴は、公同の利用という機能を示唆する。修道院においては、聖書を公的に朗読する場として礼拝堂と食堂との二箇所が挙げられる。宗教改革以前の教会は、聖書に関しては個人的な朗読と研究を重んじており、聖務日課の中心は「詩篇」の朗唱におかれて聖書は一節が朗読される程度であったが、夜半の聖務である朝課においては聖書の文章が相当の長さにならって朗読されていたのである¹⁶⁾。朝課では、一年間で福音書を除く聖書全文を読み終えるようになっていた。また、ベネディクト修道会の規則には、食事および聖務日課の際に聖書を

朗読するようにという規定がある¹⁷⁾ [p. 265–267]。

このような大型聖書には、しばしば朗読箇所のリストや、朗読箇所の開始と終了を示す欄外の印があることも、朗読という用途を裏づける。興味深いことに、これら大型聖書は典礼での朗読に不可欠なはずの福音書や「詩篇」を欠いていることが多い。その重要性や、より古い現存する福音書や「詩篇」のみから成る写本の存在を考慮に入ると、それらの書は独立した写本として既にその修道院で所蔵されていたために、新たに書写された大型聖書からは省略されたのだと考えられる。

5. 小型化：ゴシック聖書

聖書写本の形態は 13 世紀に大きな変化を見せ、ゴシック聖書として類別される。典型的な初期のゴシック聖書は、一冊に聖書全文を含みながらも、250×215 mm 程度と著しく小さく、軽く、非常に薄い羊皮紙に、縮約語を多用した小さな角張ったゴシック体 (gothic) を用いて二段組で書かれている。これは、12 世紀には注釈用に使われていた書体が本文用に使われるようになったものである。通常は大きな細密画や書の冒頭の装飾頭文字は描かれない。かわりに洗練された小さな大文字が書・序文の冒頭を飾り、各章の最初の大文字には赤・青のインクが交互に使われ、多くの場合は逆の色のペンワークで装飾されている。章番号は赤・青のローマ数字で示され、欄外標題には赤と青が一文字ずつ交互に使われることが多い。13 世紀の小型ゴシック聖書の写本あるいはその端本は多数現存しており、非常に大量に制作されたことがわかる。

小型化の背景には、12 世紀末からのパリ大学を中心とする聖書学者による聖書研究の高まりがあると考えられる。注釈に対応する本文を容易に参照できるような聖書が求められるようになり、その需要を満たすために、小型の一冊で完結する本文のみの聖書が制作されるようになったのだろう³⁾ [p. 113]。この急激な小型化と定型化は、1170 年頃の北フランスで始まり、1230 年頃に安定を見せた。そして、この変化と同時に、「パリ聖

書」として分類されうる別の特徴も発展したのである。

6. パリ聖書

「パリ聖書」という語は、厳密には特定の形態や実際の生産場所を意味するわけではない。しかし、典型的なパリ聖書の写本の特徴は次のように総括できる。一冊に聖書全文を含み、新しく標準化された一定の書の順番と特定の 64 の序文を持ち、テキストは章に分割され番号が振られており、末尾にはヘブライ名辞典 (*interpretationes nominum hebraicorum*) が付随している。書の順番は、現代のウルガタ聖書とはよく似ているが、聖ヒエロニムスの当初の順番とは大きく異なっている。本文テキストを章に分ける習慣はパリ大学で始まったと考えられており、Stephen Langton (d. 1228) の功績に帰せられている。12 世紀末から詳細な注釈付き聖書を用いた聖書研究が盛んになっていたため、標準化され、番号づけされた章を持つ参照が容易な本文の必要性が高まっていたのである¹⁸⁾。一方で、それ以前にあった四福音書対観表や各書の冒頭におかれた章目次 (*capitula list*) などの伝統的な補助ツールは姿を消した。内容的には、ウルガタ聖書の徹底的な校訂の成果というより、当時存在していた聖書に細かな多くの改良を加えたものだといえる¹⁹⁾。形態的には、典型的な小型のゴシック聖書に分類できるものが多い。パリ聖書は、既に確立していた書物取引の流通経路を通して比較的短期間のうちにヨーロッパ全土に広まり、聖書写本の標準的な本文と形態を変えた。

托鉢修道会の設立は、パリ聖書の小型化を一層進める要因となった。パリには 1229 年にドミニコ会の、1231 年にフランシスコ会の機関が設立された。前者は学識を、後者は個人的な信仰心を強調するという違いはあったが、両修道会ともに説教を重視する姿勢は共通していた。パリ聖書は、(1) 小型で持ち運びが容易、(2) テキストが比較的標準化され信頼できるため、異端への対抗が容易、(3) 章分けされ見出しがついているため、用語索引からの本文の参照が容易（前者には

Hugh of St-Cher (d. 1263) の用語索引が、後者には *Concordantiae Morales Bibliorum* があった)、(4) 商品として購入可能（托鉢修道士は修道士と違い、写字生としての訓練を受けなかった）、という点で両者の要求に適していたのである³⁾。托鉢修道士という新たな市場向けに、パリ聖書はさらに小型化されていった。

7. 14～15 世紀の聖書写本

13 世紀とは対照的に、続く 14～15 世紀の聖書の写本の生産は非常に低調であったと考えられている。この時代に作られた聖書も、当時の規範であるパリ聖書の系統に属するのが標準的だと言われているものの、15 世紀における「パリ聖書」の実態については検証が必要である。現存する写本からは、修道院改革の機運を受け、15 世紀半ば、つまり印刷術発明の直前に大型で豪華な聖書の人気が多少復活したと考えられている。しかし、前述のようにこの時代の聖書写本の研究は不十分であり、全体像が把握されていないため、どのような形態の特徴をもつ聖書写本が主流であったのかは明らかになっていない。

この時代、特に 15 世紀の聖書写本の供給の少なさは、聖書以外のテキストを含めた写本生産の全体の傾向とは大きく乖離している。既に 14 世紀には貴族階級読者向けの自国語文学も多数筆写されるようになっていた。15 世紀の写本市場は勃興しつつある市民階級という新たな読者層を得て活況を呈しており、時禱書や文学作品が大量に生産され流通していたからである。

聖書写本の生産が低調であったことは、必ずしも聖書が読まれていなかったことを意味しない。むしろ、13 世紀に作られた写本がそのまま使われ続けたり、あるいは中古品として流通したりといった要因により、新たな写本が生産されなくても十分に需要が満たされていたためではないかとされている³⁾ [p. 138]⁵⁾。

C. 写本生産とグーテンベルク聖書

このような形態の変遷の概観からは、ウルガタ聖書写本の形態と用途に関するある程度の類別が

可能である。つまり、(1) 大型であるが、福音書、詩篇、使徒書簡など聖書の特定の書のみから構成される典礼での朗読に使われる聖書、(2) そのうち豪華な装飾が施されたもの、(3) 大型で全ての書を含んでおり、典礼や修道院の食堂での朗読に使われる聖書、(4) そのうち豪華な装飾が施されたもの、(5) 小型で、全ての書を含んでおり、聖職者が個人的な聖書研究や伝道に使うための聖書、(6) そのうちテキストがパリ聖書の系統であるもの、である。

B42 は、大型のサイズで全ての書を含んでいるという点で (3) (4) に属するか、あるいはそれに近いと考えられる。また、テキストとしても、基本的には当時の標準だとされるパリ聖書の系統に属すると言われている。ただし、B42 は「パリ聖書」には含まれないはずのエズラ記 4 (ラテン語) を含み、逆に通常付随するヘブライ名辞典を持たない。

一方、聖書写本生産が低調であった時期が長く続いた後であるにもかかわらず、15 世紀半ばに出版された B42 は予約販売で完売してしまうほどの人気であったという同時代の証言や²⁰⁾、また活版印刷の初期の 1475 年までに 20 点、初期刊本時代全体では 96 点にも達するウルガタ聖書が続々と印刷されたという事実は興味深い²¹⁾。これは、B42 が聖書に対する新たな需要を掘り起こしたことを意味すると解釈することができる。従来言われてきたように、14・15 世紀の写本聖書も B42 もテキストとしては基本的にパリ聖書に属するのであれば、B42 の成功の理由は、テキスト面というよりはその提供の仕方にあるのではないかと考えられる。換言すれば、B42 は単なる写本の模倣にとどまらず、それ以前の聖書写本の類型には属さない何らかの形態的特徴を実現していたのではないかと仮定することができる。次章では、同時代の写本聖書を調査することによって、B42 が何を実現したのかを論ずる手がかりとする。

III. 写本調査

A. 調査対象の選定

調査対象は、15 世紀に書かれたラテン語ウルガタ聖書の写本に限定し、世界有数のコレクションを誇る BL を中心としてロンドンにある諸機関に所蔵されている写本を調査対象とした。調査対象写本は、BL の各写本コレクション目録および N. R. Ker 編纂の写本総合目録 *Medieval Manuscripts in British Libraries* 第 1 巻 (ロンドン篇) から選択した²²⁾。聖書には注釈付きのものと本文のみのものがあるが、注釈の有無はページ・レイアウトに影響を与えるため、本調査では B42 と同じく注釈のない本文のみの聖書写本に限定した。零葉や、注釈付きの聖書写本を除外した結果、次の 19 写本が選択基準を満たした。以下で写本に言及する際は、この番号を用いることとする。

- (1) University of London Library, MS 292. *Biblia*
- (2) University College Library, London, Lat. 22. *Novum Testamentum*
- (3) BL, Royal MS I. C. v, vi. *Bible*
- (4) BL, Harley MS 2789. *Biblorum Volumen Secundum*
- (5) BL, Harley MSS 2836, 2837. *Biblia*
- (6) BL, Harley MSS 2839, 2840. *Biblia*
- (7) BL, Additional MSS 15254-15258. *Biblia Sacra*
- (8) BL, Additional MS 15259. *Biblia Sacra*
- (9) Congregational Library, I. b. 1. *Biblia, pars I*
- (10) Congregational Library, I. b. 2. *Biblia, pars II*
- (11) Victoria and Albert Museum, National Art Library, Reid 23. *Old Testament, pars*
- (12) BL, Additional MS 11851. *Two Gospels*
- (13) BL, Additional MS 15294. *Psalter*
- (14) BL, Additional MS 16999. *Psalter*
- (15) BL, Additional MS 19896. *Apocalypse*

- (16) BL, Additional MS 26872. *Gospels and Apocalypse*
- (17) BL, Additional MS 30935. *Apocalypse*
- (18) BL, Additional MS 38121. *Apocalypse*
- (19) Wellcome Library for the History & Understanding of Medicine, 49. *Apocalypse*

このうち (12) から (19) までの 8 写本は、福音書や詩篇などの聖書の一部の書のみから構成されていた。これら 8 写本についても調査は行なったが、聖書全文から成る写本群とは性質が異なり、B42 のモデルとなった写本群に属する可能性が著しく低いことが明らかになったため、本論文の記述からは割愛する。以下では、(1) から (11) までの 11 写本を論述の対象とした。なお、写本 9・10 は同じ図書館に所蔵されて連続した請求記号を付与されており、同じ旧蔵・装丁で、写本 9 は上巻のみ、写本 10 は下巻のみから成っているが、対ではなくまったく別の写本である。

B. 調査項目

各写本について、内容（書および序文の取舍選択と順序を含む）、構造（校合式）、素材、ページ・サイズ、本文領域サイズ、段組、行数、製本、来歴、フォリオ番号、捕語 (catchword)、罫線（様式と材料）、写字生自身あるいは後世の読者による修正方法、余白の書き込み、写字生の特徴（可能な場合には写字生の同定）、書体、インクの色、制作地、同じ文字が連続する際の字体の使い分け、句読点の種類、行末揃えの方法、単語内での改行の有無、章の分け方および章番号の挿入場所、装飾頭文字、装飾に使われている色の数、という調査項目に従って調査を行った。

調査対象の 11 写本のうち、ドイツ語圏で作られた 7 写本 (1, 2, 3, 7, 9, 10, 11) は、B42 の外見のモデルとなった写本と同種の写本群に属する可能性がより高いと考え、特に詳細な調査対象とした。また、写本 5, 6 は制作地不明であるが、B42 同様の書体であるテクストゥラ体 (textura) で書かれた大型写本であるため、詳細な調査を行った。なお、書体の同定と命名は Brown に従っ

た¹²⁾。

調査は物理的特徴に限定し、テキストの本文批評は行わない。ただし、書および各書への序文の選択とその配列は調査の対象とし、パリ聖書と比較した。序文の同定には、Friedrich Stegmüller 編纂の *Repertorium Biblicum Medii Aevi* を用いた²³⁾。

C. 調査結果

第 1 表に各写本の調査結果をまとめた。上の行から順番に、写本番号、現在の巻数（一部のみ残っている場合は明記した）、素材、1 丁を構成する基本的な葉数、ページの縦×横のサイズ (mm)、本文領域の縦×横のサイズ (mm)、段組・行数、制作地、来歴、書体、使われている句読点の種類、行末揃えのための工夫、単語の分かれが生じている場所、単語が次の行などにまたがることを示すための記号、書・序文・章それぞれの冒頭の装飾頭文字が占めるスペースの行数、装飾頭文字が「I」の大文字である場合のスペースが本文の段組内であるのか外であるのか、装飾に使われている色の数、装飾頭文字や見出しに入る文字や言葉を指示するガイドレターの有無、文頭の朱の有無、「パリ聖書」の 64 の序文セットとの異同、「パリ聖書」の書の順番との異同、ヘブライ名辞典の有無を示している。

表中の「○」は有あるいは同一であることを表している。装飾の色の数の行で数字の末尾に # がついているものは、金が使われていることを示している。序文セットの行は、64 の序文セットのうち共通しているものの数およびパリ聖書とは異なる序文の数を示している。例えば、完本である写本 1 の「40/64+5」は、パリ聖書の 64 の序文セットのうちの 40 の序文に加えて他の 5 の序文を持つことを示し、新約聖書のみから成る写本 2 の「20/22+11」はパリ聖書の該当する 22 の序文のうち 20 の序文が共通で、他の 11 の序文が含まれていることを示している。なお、序文は一つの書に複数付けられる場合もあるので、必ずしも合計が 64 になるわけではない。ヘブライ名辞典の行では、「○」「×」はそれぞれ有無を示し、「－」

ゲーテンベルク聖書と写本の伝統

第1表 写本とB42

写本番号		1	2	3	4	5
巻数		4	1 (新約のみ)	2	1 (下巻のみ)	2
素材		羊皮紙	羊皮紙・紙	羊皮紙	羊皮紙	羊皮紙
1丁中の葉数		8	8	8	10	10
ページ・サイズ(mm)		339×250	284×205	380×270	330×337	480×340
本文領域(mm)		238×172	210×145	260×174	235×160	340×230
段組・行数		2段 47行	2段 43-47行	2段 47行	1段 34行	2段 35, 36行
制作地		オランダ	オランダ	オランダ	イタリア	不明
来歴		不明	修道院	修道院(アウグスチノ会)	不明	修道院(カルトジオ会)
書体		hybrida	hybrida	textualis rotunda	humanist	textualis rotunda
句読点の種類		6	4	3	4	4
行末揃えの方法		埋め草文字	埋め草文字	まれに埋め草文字	×	×
単語の分かれ		行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ
単語の分かれの印		〉, ˘, /	—	/	—	/, //
装飾頭文字 (行数)	書	3-8	6-8	7-10, 15	3	4-9
	序文	3-6	3-8	4-10	2	2-6
	章	2	2	2, 3	1, 2	2
装飾大文字「I」		左段以外では内	書は内, 章は外	verso 左段の章以外は内	外	2箇所以外は外
装飾の色数		3	2	8#	5#	4
ガイドレター		○	○	○	○	○
文頭の朱		○	○	○	×	○
「バリ聖書」の序文セットとの異同*		40/64+5	20/22+11	40/64+5	40/64+38	20/64+1
「バリ聖書」の書の順番との異同		詩篇なし, 後はほぼ同じ	○	詩篇なし, 旧約は異なる	新約は異なる	詩篇・雅歌・福音書・ティモテ下なし, 大きく異なる
ヘブライ名辞典		○	—(×)	×	×	×

の形態的特徴

6	7	8	9	10	11	B42
2	5	1	1 (上巻のみ)	1 (下巻のみ)	1 (旧約の2, 4巻 部分の合冊)	2
羊皮紙	羊皮紙	羊皮紙	紙	紙	羊皮紙	紙/羊皮紙
12	8	8	12	12	8	10
445×335	505×365	495×345	280×205	297×210	305×215	403×292
298×210	340×217	352×225	213×150	215×140	215×145	290×195
2段35, 38行	2段33行	2段59行	2段47-50行	2段41, 42行	2段42, 43行	2段42行
不明	フランドル	フランス	ドイツ	ドイツ	オランダ	ドイツ
不明	修道院(ベネ ディクト会)	不明	不明	不明	女子修道院(ア ウグスチノ会)	—
textualis rotunda	textualis quadrata	secretary	hybrida	cursiva	textualis rotunda	textualis quadrata
3	5	2	1	3	4	4
×	末尾の引き伸 ばし	×	×	×	埋め草文字・ 記号, 末尾の 引き伸ばし	活字の微調整
行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行, 段, ページ	行
/	/, //	/, //	;, ./, //	/	/	//
8-15	8	6-8, 17	3-9	5-8, 10-15	11-30	6
2-14	8	4-8	2-7	3, 4	13-21	4
2	2, 3	2	2	2, 3	2	2
書はしばしば 内, 章は外	基本的に内	内	章は内と外, 書は多くは内	外	書は内, 章は 基本的に外	外
5#	3#	7#	2	2	7#	—
○	○	×	○	○	×	×
×(ただし 装飾的)	○	×	○	○	○	×(後から 購入者が挿入)
47/64+15	49/64+12	62/64+4	14/16+1	43/64+38	6/25	41/64+14
ネヘミア記な し, 異なる	詩篇・ネヘミ ア記なし, 異 なる	○	詩篇なし, 後 はほぼ同じ	新約はわずか に異なる	該当部分は○	エズラ記4を 含む以外は○
×	×	○	—	—(×)	—	×

は写本が部分的にしか現存しないために判断できないことを示す。「－(×)」は、その写本が部分的にしか現存していないが、ヘブライ名辞典はそもそも含まれていなかったと推測できることを示している。

巻数を見ると、写本 1 は現在では 4 巻であるが、1 巻と 3 巻の冒頭の 2 箇所に 16 世紀と思われる筆跡で重さが記されていることから、当初は 2 巻に製本されていたと考えられる。写本 2 は新約聖書のみから成るが、旧約聖書の部分が欠落しているのではなく、最初から新約聖書のための写本として作られたと考えられる。写本 9 と 10 は元々は 2 巻であったと考えられる。つまり、半分以上にあたる 6 写本が元来は 2 巻から成る聖書として作られたことになる。

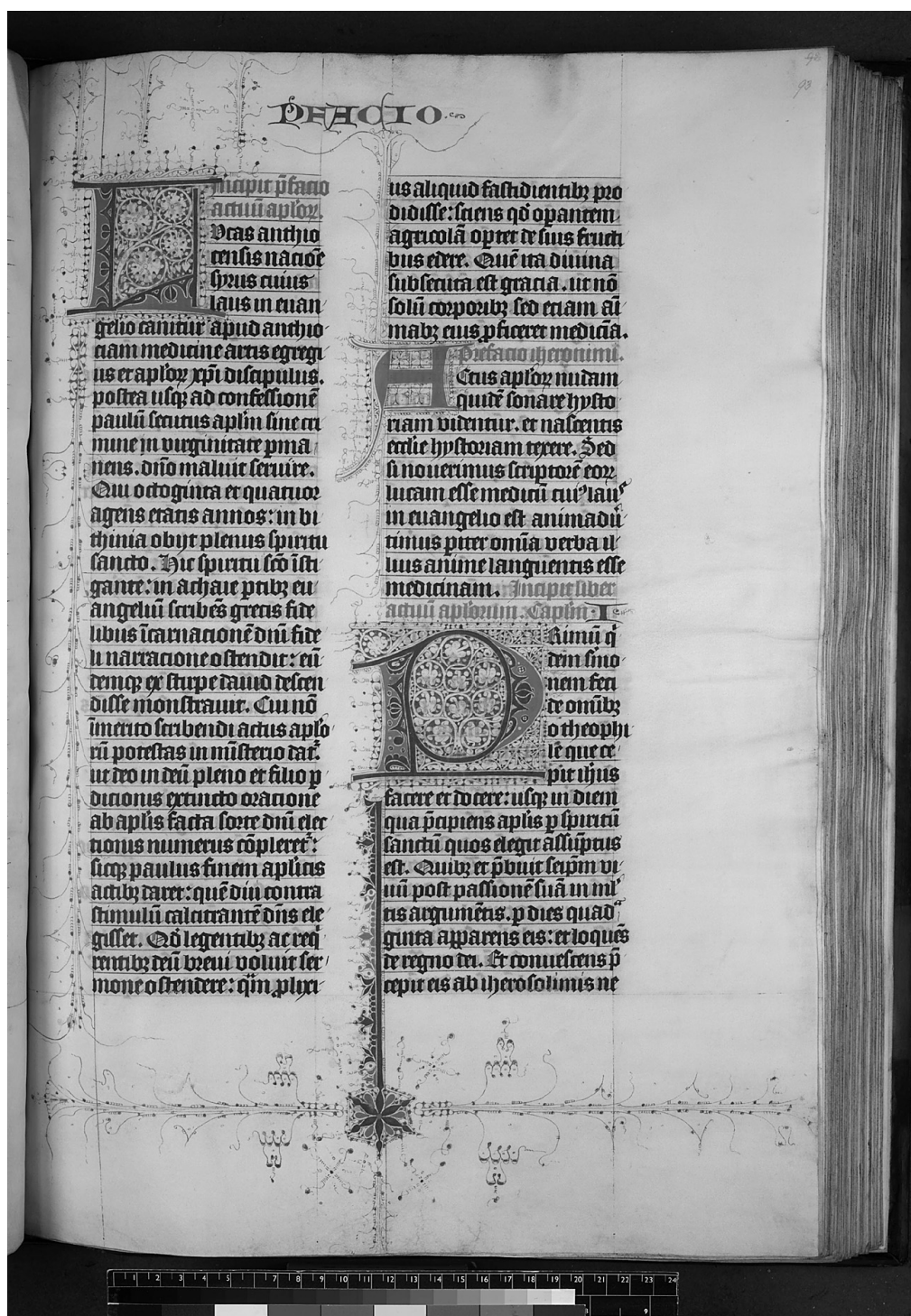
素材は、写本 2 の一部と写本 9, 10 を除き、羊皮紙であった。写本 2 は、第 2 丁から第 10 丁までの 2 枚目および 3 枚目の全紙（つまり各丁の 2・7 葉および 3・6 葉）のみが紙であった。この 3 写本は、いずれも全体的に質素な造りであった。

制作地は、ドイツ語圏が 7 写本と大きな偏りを見せている。4 写本 (1, 2, 3, 11) はオランダ、2 写本 (9, 10) がドイツ、1 写本 (7) がフランドルである。写本 3, 10, 11 には写字生のコロフォンがあった。写本 3 の各巻のコロフォンには、現オランダの Zwolle のアウグスチノ会修道院 the Agnietenberg において (“in domo clericorum Zwollis”), 上巻は 1450/51 年の 3 月 20 日、下巻は 1451 年 8 月 19 日に完成した旨が明記されている²⁴⁾。写本 10 には 2 箇所にコロフォンがあり、筆写年と写字生の名前がわかる。黙示録の末尾 (第 412 葉表) には黒インクと赤インクを用いて “1471. Conradus Freudenreich. Finita [in black ink] in vigilia armorum christi [in red ink]” とあり、第 414 葉表には “Cunz freudenreich” と再び名前が示されていた²⁵⁾。写本 11 には、2 巻部分の末尾に 1450 年 9 月 28 日、4 巻部分の末尾に 1453 年 7 月 9 日という日付があり、現オランダの Diepenveen のアウグスチノ会女子修道院で筆写されたことが明記されているが、筆写を行っ

た修道女の名前は記されていない。なお、ここは筆写に堪能なことで知られた女子修道院である²⁶⁾。2 写本 (5, 6) は制作地が同定されていない。写本 4 のみはイタリアで作られ、ヒューマニスト体 (humanist) を用いて一段組で書かれている。また、写本 8 はフランスで作られ、セクレタリー体 (secretary) で書かれ、各表ページには紙葉番号 (ローマ数字) が本文と同じ筆跡の赤インクで振られており、しかも 1 冊で完結するという特徴を持つ。この 2 写本はどちらも独自の興味深い特徴を持つが、書体やレイアウトがドイツ語圏の写本および B42 とは大きく異なり、B42 のモデルとなった写本群に属するとは考えにくいいため、本節の記述からは基本的には割愛する。

9 写本全てが 2 段組で書かれており、本文には黒、見出し (incipit および explicit) には赤、欄外標題・章冒頭の装飾頭文字・章番号には赤 (およびしばしば青) のインクが使われていた。筆跡から、写本 2, 3, 4, 5, 8, 10, 11 は一人の写字生によって書かれ、写本 1 と 7 は二人、写本 6 は三人、写本 9 は四人の写字生によって書かれたと判断できる。同じ文字が連続する場合 (“ff”, “ll”, long “ss”) は、写本 1, 6, 8 以外では二番目の文字の方がわずかに高いなどの書き分けが行われていたが、どの字の連続を書き分けるかは写本によって異なっていた。写本 6 では、小文字の “rr” が連続する際に二番目の方がわずかに広い場合も狭い場合もあり、さらに同じである場合も見られた。

書と序文の冒頭の頭文字の大きさ (占める行数) と豪華さは写本によって大きく違うが、書、序文、章の順に小さくなるという傾向は共通している。例として、第 2 図に写本 7 の第 5 巻第 93 葉表を示した。「使徒言行録への序文」冒頭頭文字 L には 6 行、「ヒエロニムスの序文」冒頭の A には 3 行、「使徒言行録」冒頭の P には 7 行が使われている。また、頭文字の前の薄い灰色に見える部分は、赤インクで書かれた見出しである。ただし、同一写本中でもスペースの大きさには完全な一貫性があるわけではなく、ばらつきがあった。全体的に豪華な写本ほど書の冒頭頭文字は大きいですが、章の冒頭の大字にはいずれの写本でも



第2図 写本7のページ・レイアウト
(BL, Add.MS. 15258, f. 93r. By permission of the British Library)

2 行分を使うのが普通であった。6 写本 (1, 2, 5, 6, 9, 11) では章の冒頭の大文字には常に 2 行分のスペースが使われており、3 写本 (2, 7, 10) では 2 行あるいは 3 行であった。

頭文字が「I」の場合は、スペースを段組内に設ける場合と設けずに左余白に描くようにする場合の両方があった。6 写本 (1, 2, 3, 6, 9, 11) ではページ内の頭文字の位置、つまり左右どちらの段であるのかということや、書の冒頭であるのか章の冒頭であるのかによって異なる規則を適用していた。ただし、いずれの写本においても規則からの逸脱が多く見られた。また、写本 9 では、一人目の写字生は章の装飾頭文字「I」のためのスペースを段組の内側に残しているが、二人目は外側に作っており、二人の写字生の間で統一はなされていない。

見出しや装飾頭文字のためのスペースには、写字生から彩色師への指示としてガイドレーターが書き込まれている写本がほとんどであった。次の丁の冒頭の言葉を示して丁合の確認の役割を果たす捕語もほとんどの写本に見られた (写本 3 と 10 には見られなかったが、再製本の際に切り落とされてしまった可能性がある)。いずれも、直前の丁の最終葉裏ページの下余白に書かれていたが、その位置には写本によって違いが見られ、写本 2 では同一写本内でも様々な位置に書かれていた。

また、ほとんどの写本では各文の大文字に朱が入れられていた。朱が入っていない 3 写本のうち、写本 4 と 8 は前述のように大きく形態が異なるものである。写本 6 には朱は入っていないものの、大文字が装飾的な形に書かれており、特別な扱いを受けていることがわかる。さらに、写本 6 は「詩篇」を含む唯一の写本であったが、「詩篇」の大文字にはその他の書とは異なり、黒ではなく、青インク・赤インクが交互に使われていた。

写本 5 と 11 (および特殊な写本 8) では、新しい書は次の段や次のページから始まっていた。写本 1 ではまれに、写本 3 でも時々ページ替えが行われていたが、その他の写本では改行のみで新しい書が始まっていた。

5 写本 (3, 5, 6, 7, 11) は、正式な書体とされ、聖

書や典礼書に多く使われたゴシック体の *textura* で書かれていた。そのうち 4 写本 (3, 5, 6, 7) は、ページの高さが 380 mm から 505 mm と、約 400 mm である B42 と同程度あるいはそれ以上の非常に大きな写本で、広い余白を持っていた。残る写本 11 も縦 305 mm と決して小型ではない。つまり、大型であることと *textura* という書体は自然な組み合わせであったと考えられる。これらの大型写本では文字も大きく、写本 3, 5, 7 では一文字の高さ (全高) が 1 cm 近くあった。また、これら 5 写本は、写本 5 以外は大きな細密画や大きな欄外装飾を持ち、装飾に金を用いた豪華な写本でもあった。

句読点は 4 種あるいはそれ以上が使われている写本が多い。句点 (.) の次には、大文字・小文字の両方が使われる場合が多かった (写本 2, 3, 4, 5, 8, 11)。写本 1 と 10 では常に大文字が使われていた。写本 6, 7, 9 には句点が使われていなかった。また、写本 1 では 2 種類の疑問符が使われ、片方には常に小文字、もう片方には常に大文字が続いていた。

余白や行間への書き込みやコロフォンから、5 写本 (2, 3, 5, 7, 11) は修道院で書写あるいは所蔵されていたことがわかる。その 5 写本と他の 2 写本 (9, 10) には、修正や追加や書き込みなどの読者による利用の形跡があったが、写本 1, 6, 8 にはほとんどあるいは全く利用の形跡が見られなかった。修道院に関係がある写本のうち、写本 2, 3, 5, 7 には朗読日の指示やアクセント記号などが書き込まれていた。ただし、写本 2 は最初にもリストがつけられているのみでアクセント記号は見られなかった。特に、写本 5 には第 338 葉表に “Iste liber est fratrum carthusiensium”, 第 266 葉表の下余白に “Iste liber totus legitur in refectorio …” と書かれているため、カルトジオ会の修道院で所蔵され、ベネディクト会同様に食堂での朗読に使われていたことが明らかである。また、写本 7 は書き込みから Liège のベネディクト会修道院 St. Jacques で所蔵されていたと判断できるが、第 1 巻 vi 葉裏には、おそらく本文を担当した一番目の写字生の手によって、聖書全体に対する朗

読の指示が書き込まれている（例えば，“Post pascha nostrum: legis actus apostolorum”）。

その他の利用のための道具としては、写本 3 の福音書には元々の写字生によってアンモニウスのセクション記号 (Ammonian sections) が入れられていた。写本 5 の末尾には目次が書かれており、各書の左右の余白には A から H までの記号が書き込まれて細分されていた²⁷⁾。写本 4, 7, 10 には一つまたは複数の書に番号付きの章目次がつけられ、本文の該当箇所には番号が書き込まれていた。写本 9 は余白に番号のみが書かれていた。4 写本（写本 2, 5, 9, 11）では、書や序文の冒頭ページの小口側に細長い羊皮紙片がはりつけられていた。これは書の冒頭を探しやすくするための付箋のような役割を果たしている。

写本 1, 2, 3, 7, 11 には埋め草を用いるなどの行末揃えへの配慮が見られた。例えば、写本 1 では、文末に “n” や “no”，あるいは前後の単語を繰り返して書いた上で取り消し線を引いている場合が多々あったが、写し間違いではなく行末揃えのための工夫として埋め草文字を入れた例だと考えられる。また、写本 11 では、“n” という読まない文字を埋め草として行末に入れて赤線を引いたり、意味を持たない埋め草記号 (〜) を挿入したり、最後の一字を引き伸ばして書いたりすることによって行末を揃えていた。ただし、複数の写字生が関わっている写本では、写字生によって埋め草文字を使うかどうかということや、その使用方法には違いがあり、統一はされていなかった。例えば、写本 7 では二人目の写字生のみが埋め草文字を使用している。

こうした行末への配慮が見られる一方で、全ての写本において単語が次の行・段・ページに別れることが許容されていた。その場合、単語の別れはハイフン (/) やダブル・ハイフン (//) で示されることが多かった。例えば、第 2 図に示した写本 7 の例では、左の段の末尾に “p[ro]lixius” という単語が書かれているが、最後の二文字 (us) が右の段の最初の行に分かれており、単語が分かれていることは “p[ro]lixi/” とハイフンによって示されている。

内容について見てみると、フォーマットや書体にかかわらず、多くの写本が「パリ聖書」とかなり類似した書の順番を示していたが、完全に同じであるのは新約聖書のみで、旧約聖書の一部からなる写本 11 と、やや特殊である写本 8 だけであった。パリ聖書の 64 の序文セットと完全に同一の序文セットを持つ写本は、調査対象中には皆無であった。また、パリ聖書に特徴的であるはずのヘブライ名辞典は、写本 1（および特殊な写本 8）のみに含まれていた。

写本 1, 3, 5, 7, 9 には「詩篇」が含まれないこと（さらに写本 5 には福音書も含まれない）、また記述対象とはしなかった写本 12～19 が詩篇や福音書、「黙示録」といった特定の書のみから構成されているということは、典礼用に一部の書だけで構成された写本を作るという習慣が 15 世紀になっても依然として存在していたことを示している。

IV. 比較

A. グーテンベルク聖書の物理的特徴

本調査では、完本で、ウェブで高解像度の画像が公開されている BL 所蔵の紙本ジョージ 3 世文庫本 (London, BL, C. 9.d.3, 4) の画像を用いた²⁸⁾。必要に応じて他の現存本の複製も参照した。

B42 は上下 2 巻で構成されており、紙または羊皮紙に印刷されている。印刷部数については諸説あるが、現在では 160 から 180 部程度で、3/4 程度が紙に印刷されたとする説が一般的である²⁹⁾。BL 所蔵本は再製本の際にページの端が化粧断ちされてしまっているため、再製本されておらず原装を残している慶應義塾図書館の紙本で計測すると、ページ・サイズは 403×292 mm、本文が印刷されている領域（版面）のサイズは 290×195 mm であり、余白が大きくとられていることがわかる。

B42 の物理的特徴を、第 1 表の一番右の列に示した。本文は 2 段組 42 行で、黒インクで印刷されている（第 1 図 a 参照）。ただし、印刷開始直後に刷られたごく一部のページは 40 行あるいは 41 行印刷である（第一版に属する現存本の上巻の第 1 葉表から第 5 葉表および第 129 葉表から

第 132 葉表が 40 行、第 5 葉裏が 41 行であり、さらに全ての現存本において第 310 葉の表裏が 41 行印刷である。40 行印刷のページでは書の開始や終了を告げる見出し（それぞれ incipit, explicit）が赤インクで印刷されているが、他のページでは手彩色で挿入するための空白が設けられているのみで、文字は印刷されていない。二色印刷には、より多くの時間とより厳密な見当が要求される。その困難さから、二色印刷という野心的な試みはすぐに放棄されたものと考えられている。一方、書・序文・章冒頭の装飾頭文字や、章番号については色刷りの試みは当初から見られず、常に空白が設けられている。しかし、欄外標題と大文字の朱に関しては何も行われていない。ただし、「詩篇」においては各文頭の大文字は印刷されずに空白が設けられ、全て後から色インクで挿入できるようになっている。なお、「バルク書」末尾の「エレミアの手紙」冒頭の見出し部分には空白が設けられておらず、黒インクで見出しが印刷されている。これは、意図的なものではなく、印刷原稿の写本に由来する間違いではないかと考えられる³⁰⁾。

冒頭の装飾頭文字のスペースは、少数の例外はあるものの、書には 6 行、序文には 4 行、章には 2 行分が設けられている。装飾頭文字が “I” である場合にはスペースは作られず、余白に描くようになっているが、章冒頭では間違っただの段の内側に空白が作られた例も見られる。

ガイドレターや捕語は、ページ中には一切印刷されていない。そのため、現存する B42 のなかには誤った頭文字を挿入している事例もしばしば見受けられる。見出しについては彩色師のために入れるべき言葉を黒インクで印刷した別丁の 4 葉から成る索引が 2 部現存しており、本文と一緒に販売されたものと考えられている。しかし、現存する B42 に挿入された見出しには、その索引の指示に従っていないものも多く、本文よりも自由度が高いものとして捉えられていたのではないかと考えられる。

書体は正式なテキストゥラ・クォドラータ体 (textualis quadrata) である。字体は句読点を含

めて約 270 と非常に多く、基本アルファベット以外に約 30 の異字体、60 の連字、120 の省略用字体（縮約語）を持つ。この縮約語はいずれも当時の写本に伝統的に使用されてきたものである。字体の使い分けは、いずれも当時のゴシック体を書くときの規則に準じていると考えられる。具体的には、Schwenke が明らかにしたように、右側に張り出した活字 (c, e, f, g, r, t, x) の次には、左側を平らにした活字が使われている³¹⁾ [p. 19–20]。これは、できるだけ文字の縦の線を等間隔にするための工夫だと考えられる。安形による最近の校合の成果からは、こうした規則を遵守するためだと考えられる印刷途中の修正作業の存在が明らかになっており、印刷者が字体の使い分けに細心の注意を払っていたことがわかる³²⁾。同じ文字の連続に関しては、“rr” の場合は二番目の r は規則に従って左側が平らな活字であることに加え、高さが異なる例も見られたものの、現時点では規則性を把握することはできなかった。使用されている句読点は 4 種類で、句点 (.) および疑問符の次には必ず大文字が、コロン (:) と中黒 (·) の次には必ず小文字が使われている。

埋め草文字・記号は一切使用されていないが、多くの縮約語の活字の使用により、行末は非常によく揃っている。縮約語を用いることで、ちょうど日本語の漢字とひらがなの使い分けと同様の調節が可能になるのである。さらに、行末にきた句点・ハイフン・数字の 5 の形をした s は段の外に、コロン・中黒は段内に印刷するという規則が見られる。

単語が次の行に分かれることは多く、その場合はダブル・ハイフンで示されている。しかし、単語が次の段や次のページにまたがることは決していない³³⁾。

パリ聖書と比較すると、エズラ記 4（ラテン語）を含んでいるという以外は、書の選択と順序は同一であった。エズラ記 4（ラテン語）が印刷されている丁が変則的な構成となっており植字の順序も変則的であることから、Needham はこの書は元々の印刷原稿写本ではなく別の写本を原稿として植字したものだとしている³³⁾ [p. 413–420]³⁴⁾

[p. 348-351]。序文に関しては大きな違いがあり、パリ聖書の 64 の序文セットのうちの 41 に加え、その他の 14 の序文を持っていた。奥付や目次はもちろん、章目次や朗読指示などの本文以外の要素は全く含まれていなかった。

B. グーテンベルク聖書と写本の比較

1. 形態的な比較

2 段組 42 行で、ページ番号やフォリオ番号のない黒インクによる本文という B42 のページ・レイアウトは、写本 4 を除く全ての調査対象写本とよく似ている。一方で、おそらくは技術的な限界から、見出し、装飾頭文字、欄外標題、章番号等の色刷りは断念されており、全ての写本に共通して見られた色による構造化は行われていない。しかし、見出しと書や章の冒頭の大文字と章番号に関しては、植字作業がより複雑になるにもかかわらず、黒で印刷するのではなくわざわざ空白を残しており、さらに「詩篇」の大文字も空白にして赤・青で挿入できるようにしている（写本 6 と同様である）。このことから、色による構造化に関する印刷者の強い意識を窺い知ることができる。逆に言うと、印刷直後の白黒の状態では、当時の読者には未完成の書物として認識されたのではないかと考えられる。実際に、B42 の現存本において、色数や洗練度や豪華さの程度に差はあるものの、見出し、装飾頭文字、欄外表題、章番号等が購入後に手描きで挿入されている。

装飾頭文字のスペースは、書の冒頭が一番大きく豪華であり、序文・章の順に小さくなるという写本の伝統に従っているが、写本では同一写本の中でもかなり大きさのばらつきがあるのに対し、B42 においては非常に一貫性が高い。同様に、多くの写本において「I」という装飾頭文字を挿入する際に、本文の段組内に入れるかどうかは書の冒頭であるか章の冒頭であるか、あるいはその出現位置による細かい規則が見られ、さらに同一写本内でも写字生による違いがあったが、B42 においては基本的にはすべて外側に出され、標準化されていた。

B42 の物理的な大きさからは、写本と同様であ

れば羊皮紙という素材の方が自然であったと思われるが、実際には B42 の総部数の 3/4 は紙に印刷されたと考えられている。調査対象の中で紙に書かれていたのは写本 2, 9, 10 という質素で比較的小型の写本のみであった。

B42 において単語が次の行に別れることは写本同様に多く、ダブル・ハイフン (//) で示されているが、B42 に特徴的なこととして、単語が次の段やページにまたがることは決してない。これは、非常に豪華なものを含む全ての写本において、一つの単語が次の行だけでなく次の段や次のページにまで分かれることが許容されていたのと同対照的である。これは、筆写と違い、後から 1 行内での微調整を行うことができることから初めて可能になったと考えられる。しかし、単に写本を模倣したのであれば段やページに単語が分かれることがあっても不思議ではないので、単語の段・ページ分かれが避けられているのは意識的な植字規則の導入の成果だと考えられる。

5 写本において埋め草文字・記号の使用や行末の語を引き伸ばして書くことによって行末を揃えて見せるという工夫が見られたが、B42 は埋め草文字を一切使用することなく、写本よりもきれいに行末を揃えることに成功している。これは活字を組む作業中にスペースの微調整が可能であるという技術的利点をよく活かした結果だと考えられる。しかも、調査対象写本には例がなかったが、B42 には句読点の位置に関する配慮が見られた。B42 では行末に現れた句点・単語別れを示すダブル・ハイフン・5 形の s および単語の行別れを示すダブル・ハイフンは段組の外側に印刷し、コロんと中黒は段組の内側に印刷するという独自の規則を持つことによって、さらに行末揃えの精度を高めている。なお、中黒の位置は、初期に印刷されたと考えられるページでは特に規則性が見られないが、後半では必ず内側に印刷されており、意識的な行末揃えのための工夫であることがわかる。

写本 1 と 8 を除く全ての写本には、“ff” や “ll” などの文字が連続する際に二番目の文字をわずかに大きくするという書き分けが見られたが、B42

では規則が簡略化され、使い分けは行われていない。一方で、B42 には“rr”という文字が連続した場合に高さが異なる形の r を使用するという使い分けが見られたが³²⁾、今回調査した写本の中には同じ現象を見つけることができなかった。異なる字体の活字を鋳造するには労力に見合う理由があったと考えるのが自然であるので、この点に関してはさらなる調査が必要である。

B42 の句読点は中世に一般的に使われていたレパートリーに含まれる 4 種類であり、写本と比べて大きな種類の違いはない。ただし、写本においては、ある句読点の後に使われる文字種が大文字の場合も小文字の場合もありうる場合が多かったのに対し、B42 では句読点と次に続く文字種の関係が完全に決まっている。これは、原稿の写本をそのまま模倣したのではない可能性が高い。ラテン語リテラシーがそれほど高くない職人であっても植字が可能であるようにするために、規則を標準化・簡略化したのではないかと考えられる。

また、B42 の本文は分割され、複数の職人によって同時並行で植字・印刷が複雑に進められていったことが先行研究から明らかになっているが³⁵⁾、分割による規則やレイアウトの差異は見られなかった。一方、写本においては担当した写字生によって異なる規則が適用されているのが普通であった。

最後に、15 世紀の規範といわれるパリ聖書との関係を見てみると、B42 はパリ聖書にないはずの「エズラ記 4 (ラテン語)」を含み、ヘブライ名辞典は含まず、序文の選択と順序が大きく異なるという逸脱が見られた。調査対象写本の書の順番は、特殊な例であった写本 8、新約聖書のみで写本 2、部分的にしか現存していない写本 11 を除くと、いずれもパリ聖書と完全に同一というものはなかった。また、調査対象写本には、序文の選択と順序もパリ聖書とは異なるという B42 と同様の逸脱が見られた。しかし、B42 と同様「エズラ記 4 (ラテン語)」を含む写本は皆無であった。Needham は、Ker 編纂の在英写本目録の 13 世紀から 15 世紀に制作されたパリ聖書系統の 75

写本のうち「エズラ記 4 (ラテン語)」を持つのはわずかに 3 写本であり、しかもその 3 写本も B42 とは異なる章の分け方がされていることを指摘している³⁶⁾。

ヘブライ名辞典が付随していたのは写本 1 と 8 だけであり、B42 にヘブライ名辞典がないことは、15 世紀の聖書としてはむしろ普通であったといえる。また、パリ聖書の序文セットと完全に同じ序文セットを持つ写本も調査対象中には一つもなかった。なお、前述の The Giant Bible of Mainz も 57 の序文はパリ聖書のセットと共通であったが、さらに 58 の異なる序文を持っている³⁷⁾。このことから、15 世紀の写本聖書の構成には揺らぎが出てきており、従来言われてきたように必ずしも標準化された規範的なパリ聖書ではなかったことが確認できた。

2. 用途

次に、B42 がどのような種類の写本に特によく似ているのかを検証することにより、用途の推定が可能になると考えられる。第 2 表に、特殊であり B42 と比較するには適さない写本 4 と 8 を除く 9 写本との比較結果を簡単にまとめた。「○」が多いほど、共通点が多いことを示す。共通点がないか、非常に少ない写本 1, 2, 9, 10 は小型で、共通点が多いものは大型聖書であった。

書体に着目すると、5 写本 (3, 5, 6, 7, 11) は正式な書体であるゴシック体の textura で書かれて

第 2 表 用途の推定

	写 本										
	1	2	3	5	6	7	9	10	11	B42	
大型サイズ			○	○	○	○			△	○	
Textura 体			○	○	○	○			○	○	
大きな文字				○	○	○				○	
利用の形跡	○	○	○	○		○	○		○	○	
(朗読)		△	○	○		○				○	
修道院		○	○	○		○			○	○	
行末揃えの埋め草文字	○	○	○			○			○		

いた。そのうち4写本は、縦40 cmから50 cmくらいとB42と同程度あるいはそれ以上の非常に大きな写本で、広い余白を持っており、残る写本11も縦30 cmと小さくはない。つまり、大型であることとtexturaの本文が自然な組み合わせであったことがわかる。そうした大型写本では文字も大きく、写本3, 5, 7では一文字の全高が約1 cmあった。ただし、大型写本の装飾頭文字は総じてB42よりも大きいという傾向が見られた。また、B42はそれら大型写本よりも縮約語の使用頻度が高かった。

写本3, 5, 7はB42との共通点が多いが、いずれも修道院で書写あるいは所蔵されていたものである（写本7については第2図を参照）。写本3と7は装飾に金が使われている豪華なものであるため、修道院の聖書が常に質素な写本を意味するわけではないが、書き込みや修正など利用の形跡から、装飾や鑑賞のために置かれていたのではなく、実際に使われていたことが明らかである。写本5のように食堂での朗読用である旨が明記されていなくても、発音を助けるためのアクセント記号が書き込まれていたり、朗読日の指示が書き込まれていたりすることから、食堂や典礼での朗読に使われていたと推測できる。ここで、写本3に書き加えられた朗読を助けるためのアクセント記号の中には、BL所蔵のB42に書き加えられた単語・記号と全く同じ例があることは特筆に値する。この両者において「創世記」第1章に出てくる「maria」という「海」を意味する単語の最初のaにアクセント記号が手で書き加えられているが、これは誤って「乙女マリア」とiにアクセントをおいて発音してしまうことを防ぐためのものだと考えられる。写本3はオランダのアウグスチノ会修道院で制作および所蔵されていたものであり、BL所蔵のB42は17世紀にはドイツ・ヴュルツブルクのベネディクト会修道院St. Jacobusで所蔵されていたことがわかっているため、このアクセント記号は修道院での朗読に使われた際のものだと考えるのが妥当だろう。

B42出版の正確な動機は推測の域を出ないが、大型であること、その割には小さな装飾頭文字用

のスペース、texturaの使用、大きな文字、縮約語の多用、紙本の方が多いと推定されることなどは、B42が修道院・教会向けの実用性の高い大型聖書であったことを示唆する。先行研究において、KönigはB42現存本の手描き装飾の分析からB42は豪華写本の代替物として意図されたのではないとして、豪華写本代替説を唱えるLehmann-Hauptに反論している³⁸⁾。今回の調査結果もKönigの分析結果を裏づけるものとなった。現在判明しているB42現存本の実際の購入者は必ずしも修道院であるとは限らないが、個人が購入した後に修道院などへ寄付したと考えられる例も多い³⁹⁾。この背景として、15世紀半ばのドイツにおける教会改革運動との関連が考えられる⁴⁰⁾。改革を熱心に進めていたドイツ人初の枢機卿Nicolaus Cusanusは1440年代にドイツに滞在しており、1451年には腐敗した修道院の視察・改革のためにドイツ・オランダへ派遣されている⁴¹⁾。

また、SchneiderはB42のテキストを調査した結果、縮約語が誤った形で開かれたと考えられる単語が多いことから、現存していないB42の印刷原稿の写本は小型で縮約語が多用された写本であっただろうと指摘している⁴²⁾。今回の写本との比較調査により、B42の外見上のモデルとなったのは、大型で比較的簡素な修道院や教会などで朗読に使われていた類の写本であったことが確認できた。つまり、B42は小型の写本を原稿として用いつつ、形態的には修道院向けの大型の写本をモデルとしたと考えられる。

V. 写本の伝統

本調査からは、B42のレイアウトは基本的には写本の伝統に忠実であろうとしていることが明らかになった。写本に慣れた読者のために非常に多くの字体を鋳造する手間をかけたのもその現れだろう。大型聖書にtexturaの書体を使うのは、写本の傾向とも一致する。ただし、本調査ではB42と全く同じ書体textualis quadrataで書かれた写本は一つだけ（写本7）であり、この書体の採用理由の解明には今後の研究が必要である。な

お、興味深いことに、初期刊本時代に印刷された多くのウルガタ聖書のなかでも同じ *textualis quadrata* を用いているのは、B42 と関係が深い 36 行聖書のみとなっている。

しかし、おそらくは技術的な限界から、見出し、装飾頭文字、欄外標題、章番号等の色刷りは断念され、写本に通常見られた色による構造化は行われていない。黒で印刷することもなく空白を設けるのは、直後の印刷本での慣行となる。同様に、写本に通常見られる捕語や装飾頭文字の指示も印刷されていない。これも、技術的な制約によるものだと考えられる。

一方、見出しの指示として索引を別に印刷しているのは、印刷と朱書きが別の場所で別の職人によって行われ、その工程には印刷者が関与しないという新たな状況に対応した結果だと考えられる。例外はあるものの、初期刊本時代の書物は朱や装飾が入らないままの未製本の状態で売買されることが普通であり、印刷はそれだけで独立した工程であった。

B42 の装飾頭文字のために残されたスペースには、写本に共通して見られた書・序文・章という大きさのヒエラルキーが継承されているが、より一貫性が高く、標準化されている。また、句読点の使い方も標準化されている。

微調整が可能であるという活版印刷術の利点を活かし、B42 の行末揃えが改良されているのは当然予想されるところであるが、これは活版印刷という技術革新の単なる付随的な結果ではない。行末揃えを容易にするために様々な異字体の活字を鋳造する手間をかけ、新たな規則を制定し、写本ではむしろ当然であった担当者によるばらつきをなくすという様々な配慮によって達成された意識的な改良である。さらに単語の段分かれやページ分かれを避けたり、行末の句読点の印刷位置を定めたりといった、それ以前は豪華な写本にさえなかった行末揃えへの新しい規則が見られる。

このように、B42 は、植字の数々の厳密な規則を制定し遵守することによって、高い一貫性を持ったより統一感のあるページ・レイアウトの確立に成功し、続く印刷本のモデルとなった。その

規則は、一方では従来の形態の標準化、他方では新たな規則の導入による精緻化、という二つの方向性を持っていた。

つまり、B42 は従来捉えられてきたような「写本の模倣」ではなく、厳密には「写本の理想型」を目指していたのではないかと考えられる。理想型の追求が、筆写によって生産される写本では技術的に不可能であったレベルの精緻化を結果的に実現したのだと考えられる。B42 が目指したこの方向性は、その後の印刷本の特徴となる。

同時に、15 世紀の写本聖書の書の取捨選択や順番は基本的にパリ聖書のものに近いものの、序文に関しては大きな揺らぎがあり、必ずしも完璧なパリ聖書とは呼ぶことができないものであることが明らかになった。しかし、写本間で大きな違いがあったのとは対照的に、B42 の書・序文の選択は、エズラ記 4 (ラテン語) も含め、これ以降のほぼ全てのウルガタ聖書に受け継がれていった。初期刊本時代に印刷された 81 点のウルガタ聖書のうち、B42 のテキストの系統に属していないのはわずか 2 点であり⁵⁾ [p. 56], B42 が内容においても新たな伝統を作り上げたといえることがわかる。

印刷本は、次第に標題紙の使用や紙葉の番号付けが一般的になり、赤字を使わないなどの新しい特徴を備えるようになり、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけてほぼ現在のような書物の外見的特徴を持つようになっていった⁴³⁾。物理的特徴の斬新的な変化は、当時の「書物」の表象が、印刷本の誕生を契機に、写本から新たな構造と機能を備えたものへと次第に変化していった結果であると考えられる。換言すれば、生産者、従来の読者、新興の読者がそれぞれ心に抱く書物の姿が徐々に変化していき、その期待を満たすために書物の外見が変化したということであり、B42 がその契機となったのである。

謝 辞

本論文はロンドン大学に提出した修士論文を基にしています。ご指導いただいたロンドン大学 P. R. Robinson 教授、慶應義塾大学田村俊作教

授、調査ならびに画像複製を許可してくださった各写本・刊本の所蔵機関に謝意を表します。

注・引用文献

- 1) 例えば, Lambeth Palace Library が所蔵する B42 (London, the Lambeth Palace Library, MS. 15) は, 1812 年の写本目録に「写本 15 番」として記載された。混乱を避けるため、現在でも同じ請求記号が使われ続けている。
- 2) Miner, Dorothy. The Giant Bible of Mainz: 500th Anniversary, April Fourth, Fourteen Fifty-two, April Fourth, Nineteen Fifty-two. [Philadelphia, 1952], 31 p.
- 3) 例えば, “It is often asserted that the Gutenberg Bible was made to resemble a medieval manuscript.” [p. 205]. De Hamel, Christopher. The Book: A history of the Bible. London, Phaidon, 2001, 352 p. (日本語訳: 聖書の歴史図鑑。朝倉文市監訳。東京, 東洋書林, 2004, 350 p.)
- 4) 一群の豪華写本については, 次の研究がある。Vaasen, Elgin. Die Werkstatt der Mainzer Riesenbibel in Würzburg und ihr Umkreis. Archiv für Geschichte des Buchwesens. vol. 13, no. 5-6, 1973, p. 1121-1428.
- 5) Needham, Paul. “The changing shape of the Vulgate Bible”. Bible as Book: The first printed editions. Saenger, Paul; Van Kampen, Kimberly, ed. London, British Library, 1999, p. 53-70.
- 6) 共同訳聖書実行委員会。聖書: 新共同訳。東京, 日本聖書協会, 1997。
- 7) Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem. Stuttgart, Deutsche Bibelgesellschaft, 1994.
- 8) Loewe, Raphael. “The Medieval history of the Latin Vulgate”. The Cambridge History of the Bible, ii, The West from the Fathers to the Reformation. Lampe, G. W. H., ed. London, Cambridge University Press, 1969, p. 102-154. なお, vulgata は, 「民衆」を意味する vulgus という語から派生した。
- 9) すなわち, 「マナセの祈り」, 「エズラ記 3 (エズラ記 (ギリシャ語))」, 「エズラ記 4 (エズラ記 (ラテン語))」, 「トビト記」, 「ユディト記」, 「エステル記」への追加 (10: 4-16: 24), 「知恵の書」, 「シラ書 (集会の書)」, 「バルク書 (末尾にエレミアの手紙を含む)」, 「ダニエル書補遺 (3: 24-90, 13, 14)」, 「マカバイ記 1・2」である。なお, 今日のローマ・カトリックおよび東方正教会の聖書には, 「エズラ記 3・4」, 「マナセの祈り」を除く全ての書が第二正典として含まれている。一方, プロテスタントの聖書には, 1611 年出版の英語の欽定訳聖書を唯一の例外として, いずれの書も含まれない。文献 6 の新共同訳聖書には, 「旧約聖書続編」として収録されている。簡便な表は次の文献の p. 22-24 を参照。De Hamel, Christopher. The Book: A history of the Bible. London, Phaidon, 2001, 352 p.
- 10) 序文は翻訳者である聖ヒエロニムスの書簡であることが多い。例えば, 中世のウルガタ聖書の冒頭は創世記ではなく聖ヒエロニムスが司祭パウリヌスに宛てた書簡から始まっている。その邦訳については, 次の文献の p. 137-139 を参照。富田修二。グーテンベルク聖書の行方。東京, 図書出版社, 1992, 376 p.
- 11) C. H. Roberts と T. C. Skeat が行った 1 世紀から 5 世紀までのギリシャのパピルスおよび羊皮紙の資料約 3,000 点の調査では, キリスト教関連の書物はほとんど全てが冊子本であったのに対し, その他の文献は 3 世紀まではほとんど全てが卷子本で, 4 世紀も卷子本の方が依然として主流であり続けたという結果が出ている。Roberts, Colin H.; Skeat, T. C. The Birth of the Codex. London, Published for the British Academy by the Oxford University Press, 1983, 78, vi p.
- 12) 書体名は以下の文献に拠った。Brown, Michelle P. A Guide to Western Historical Scripts from Antiquity to 1600. London, British Library, 1990, 138 p. ただし, 書体名の日本語表記は文献 14 にならった。
- 13) *Codex Amiatinus* は 9 巻本のカシオドルスの *Codex Grandior* を基にして作られた。しばしば複製されるこの写本の口絵には, 書記 (エズラ) が本棚に置いた 9 巻本の聖書写本を前に座っている様子が描かれている。Ricci, Luigi G. G., ed. The Codex Amiatinus: Complete reproduction on CD-ROM of the manuscript. 1 CD. Florence, SISMEL, Edizioni del Galluzzo, 2000.
- 14) Stan, Knight. 西洋書体の歴史: 古典時代からルネサンスへ。高宮利行訳。東京, 慶應義塾大学出版会, 2001.
- 15) Cahn, Walter. Romanesque Bible Illumination. Ithaca, N.Y., Cornell University Press, 1982.
- 16) Harper, John. “第六章 聖務日課”。中世キリスト教の典礼と音楽。佐々木勉, 那須輝彦訳。東京, 教文館, 2000, p. 109-168.
- 17) Benedict, Saint, Abbot of Monte Cassino. The Rule of St. Benedict: A Commentary by Paul Delatte. McCann, Justin, trans. London, Burns Oates & Washbourne, 1921, xvi, 508 p.
- 18) Parkes, M. B. “The influence of the concepts of Ordinatio and Compilatio on the Development of the Book”. Scribes, Scripts and Readers: Studies in the communication, presentation and dissemination of medieval texts. London, Hambledon Press, 1991, p. 35-71.

- 19) Light, Laura. "French Bibles c. 1200-1230: A new look at the origin of the Paris Bible". The Early Medieval Bible: Its Production, Decoration, and Use. Gameson, Richard, ed. Cambridge, Cambridge University Press, 1994, p. 155-76.
- 20) 1455年3月に書かれた Aeneas Silvius Piccolomini (後の教皇 Pius 2 世) が司教 Carvajal に宛てた手紙による。原文および英訳についてはそれぞれ次の文献を参照。原文: Meuthen, Erich. Ein Neues Frühes Quellenzeugnis (zu Oktober 1454?) für den Ältesten Bibel-druck: Enea Silvio Piccolomini am 12. März aus Wiener Neustadt an Kardinal Juan de Carvajal. Gutenberg Jahrbuch. vol. 57, 1982, p. 108-118. 英訳: Needham, Paul. The Paper Supply of the Gutenberg Bible. The Papers of the Bibliographical Society of America. vol. 79, no. 3, 1985, p. 303-374 (p. 309).
- 21) 初期刊本のデータベース *Illustrated ISTC* での検索結果による (注釈付き・なしの両方を含み, 1501 年以降の印刷であることがわかっている 3 点を除いた数)。[Martin Davies, ed.]. The Illustrated ISTC on CD-ROM. 2nd ed. Reading, Primary Source Media in association with the British Library, 1998.
- 22) Ker, N. R., ed. Medieval Manuscripts in British Libraries. Oxford, Oxford University Press, 1969-92, i: London (1969). この p. 96-97 には, 「パリ聖書」の序文の簡便な一覧表がある。なお, Lambeth Palace Library 所蔵の写本目録も参照したが, 条件に該当する写本はなかった。
- 23) Stegmüller, Friedrich. Repertorium Biblicum Medii Aevi. Madrid, 1950-80, 11 vols.
- 24) 以下の文献に収録されている。Watson, Andrew G. Catalogue of Dated and Datable Manuscripts c. 700-1600 in the Department of Manuscripts, The British Library. 2 vols. London, British Library, 1979, p. 149 (vol. 1) および plate 518 (vol. 2).
- 25) ただし, 彼の名前は以下の文献に載っていなかったため, それ以上の情報は得られなかった。Saint-Benoît de Port-Valais. Colophons de Manuscrits Occidentaux des Origines au XVIe Siècle. 6 vols. Fribourg, Suisse, Éditions universitaires, 1965-79.
- 26) Scheepsma, Wybren. Deemoed en Devotie: de Koorvrouwen van Windesheim en hun Geschriften. Amsterdam, Prometheus, 1997, p. 62-65.
- 27) Lectura divina のための細分だと思われる。Saenger, Paul. "The impact of the early printed page on the reading of the Bible". Bible as Book: The first printed editions. Saenger, Paul; Van Kampen, Kimberly, ed. London, British Library, 1999, p. 31-51.
- 28) British Library. "Gutenberg Bible: View the British Library's digital versions online" <<http://www.bl.uk/treasures/gutenberg/homepage.html>> [最終確認日: 2005-8-18]. なお, 現存する 48 部の B42 のうち, 2005 年 8 月現在までに合計 12 部がデジタル化され, うち 8 部がウェブ上または市販 CD-ROM の形で利用可能である。
- 29) Needham, Paul. The Paper Supply of the Gutenberg Bible. The Papers of the Bibliographical Society of America. vol. 79, no. 3, 1985, p. 303-374.
- 30) 今回調査した写本のうち, 3 写本には「バルク書」が含まれておらず (新約聖書のみから成る写本 2, 書の順番が非常に変則的であった写本 5, 上巻のみ現存する写本 9), 4 写本には「バルク書」はあるが「エレミアの手紙」は含まれていない (写本 3, 6, 8, 11). 「バルク書」末尾に「エレミアの手紙」を持つ残りの 4 写本 (写本 1, 4, 7, 10) では, いずれも見出しは赤インクで書かれていた。
- 31) Schwenke, Paul. Untersuchungen zur Geschichte des Ersten Buchdrucks. Berlin, Behrend, 1900.
- 32) Agata, Mari. Stop-press variants in the Gutenberg Bible: The first report of the collation. The Papers of the Bibliographical Society of America. vol. 97, no. 2, 2003, p. 139-165.
- 33) 唯一の例外として, 上巻 310 葉表の左コラム最終行 (41 行) から右コラム冒頭にかけて単語の段別れが見られるが, これは植字終了後に 42 行から 41 行へ変更された変則的なページであり, 本来の植字終了時には段別れは避けられていた。Needham, Paul. Division of Copy in the Gutenberg Bible: Three glosses on the ink evidence. The Papers of the Bibliographical Society of America. vol. 79, 1985, p. 411-426.
- 34) Needham, Paul. The compositor's hand in the Gutenberg Bible: A review of the Todd thesis. The Papers of the Bibliographical Society of America. vol. 77, 1983, p. 341-371.
- 35) 代表的な研究としては, 文献 27, 29, および次の文献を参照。Schwenke, Paul. Johannes Gutenbergs zweiundvierzigzeilige Bibel: Ergänzungsband zur Faksimile-Ausgabe. Leipzig, 1923.
- 36) Paul, Needham. "The Text of the Gutenberg Bible". Trasmissione dei testi a stampa nel periodo moderno, II, Seminario internazionale, Roma-Viterbo, 27-29 giugno 1985. Crapulli, Giovanni, ed. Rome, Edizioni dell'Ateneo, 1985, p. 43-84.
- 37) Schutzner, Svato. Medieval and Renaissance

- Manuscript Books in the Library of Congress: A Descriptive Catalog, I, Bibles, Liturgies, Books of Hours. Washington, The Library, 1989, p. 41-47.
- 38) König, Eberhard. "Die Illuminierung der Gutenbergbibel". Johannes Gutenbergs zwei- und vierzigzeilige Bibel: Kommentarband. Schmidt, Wieland; Schmidr-Künsemüller, Friedrich, ed. München, Idion Verlag, 1979, p. 69-125.
- 39) Jensen, Kristian. "Printing the Bible in the fifteenth century: Devotion, philology and commerce". Incunabula and their Readers: Printing, Selling and Using Books in the Fifteenth Century. Jensen, Kristian, ed. London, British Library, 2003, p. 115-138.
- 40) König, Eberhard. Möglichkeiten kunstgeschichtlicher Beiträge zur Gutenberg-Forschung: Die 42zeilige Bibel in Cologny, Heinrich Molitor und der Einfluß der Klosterreform um 1450. Gutenberg Jahrbuch. vol. 59, 1984, p. 83-102.
- 41) Love ToKnow 1911 Online Encyclopedia. "NICOLAUS CUSANUS". <http://9.1911ency-clopedia.org/C/CU/CUSANUS_NICOLAUS.htm>, [最終確認日: 2005-12-5]. Cusanus とグーテンベルクの関係については次の文献を参照. Kapr, Albert. Gab es Beziehungen zwischen Johannes Gutenberg und Nikolaus von Kues? Gutenberg Jahrbuch. vol. 47, 1972, p. 32-40.
- 42) Schneider, Heinrich. Der Text der Gutenbergbibel. Bonn, Peter Hanstein Verlag, 1954, 120 p.
- 43) Smith が約 4,200 点の初期刊本の 1 ページ目の内容を調査した結果によれば, 最初は写本と同様の incipit および本文であるものが主流であったが, 1470 年代後半には白紙が半数程度を占め, 1480 年代後半には標題紙であるものの割合が急増し, 1500 年頃には調査対象中の 75% が何らかの標題紙を備えていた. Smith, Margaret M. The Title-Page: Its early development 1460-1510. London, British Library and Oak Knoll Press, 2000. 紙葉・ページ番号については次の文献を参照. Smith, Margaret M. Printed foliation, forerunner to printed pagination? Gutenberg Jahrbuch. vol. 63, 1988, p. 54-70.